

TOPICS OF GI

消化器疾患のトピックス

企画



藤本一眞

佐賀大学医学部内科学 教授
(本誌「TOPICS OF GI」コーディネーター)

大分大学医学部消化器内科の村上和成教授に、専門分野である *H. pylori* 感染と胃がんの関係をもとめていただいた。2年前に胃炎に対する *H. pylori* 除菌治療が保険適用になり、除菌治療が普及しているが、除菌治療の意義を正確に認識していない医療関係者も少なくない。本総説に記載されているように *H. pylori* 感染者がいなくなれば胃がん患者が激減すること、感染が成立するのは幼少時であること、経口的に感染し家族内感染があることなどが正確に伝われば、胃がん撲滅のためには除菌治療が必須であることがもっと普及するはずである。人間ドック、胃がん検診などで *H. pylori* 感染の有無を調べる施設も増えているが、自治体などの主導による網羅的な感染検査の普及と除菌治療が望まれる。今回の総説では *H. pylori* 感染と胃がんの関係が簡潔にまとめてあり、あらためて勉強するには絶好の内容である。

第21回

H. pylori と胃がんの今後

村上和成

大分大学医学部消化器内科教授

はじめに

H. pylori 感染胃炎に除菌治療が保険適用となって2年が経過した。この間飛躍的に除菌症例が増加している。除菌による胃がん抑制を示す報告でも除菌後胃がんは消失しないことが判明している。また、*H. pylori* 感染者は若年者では10%以下であり、今後胃がんは減少していくものと考えられるが、相対的に除菌後胃がんや *H. pylori* 未感染胃がんが増加すると考えられる。本テーマでは *H. pylori* と胃がんの今後について概説する。

1 これからの *H. pylori* 感染率

図1にわが国の *H. pylori* 感染率の推移を示す。1992年北海道大学の浅香教授のデータでは、40歳以降で感染率は70%前後でプラトーに達しているが、その後の大分大学の検討では、ピークは次第に左へシフトしており、60歳代がピークとなりそのピークも年を追うごとに低下している。すなわち感染率は若年者から低下しており、最近の疫学的な研究結果では、20歳未満では10%未満の感染率となっている。現在、除菌治療が盛んに行われるようになったが、今後の感染率の推移としては、除菌が行われなくても次第に低下していくと推測される。現在日本人の *H. pylori* 感染率は30~40%と指摘されているが、これから50年後には、日本人の感染率は10%程度になると思われる。

PROFILE



Kazunari Murakami

むらかみ・かずなり ● 1983年広島大学医学部卒業。同年大分医科大学第二内科入局。1990年同大学院（生化学専攻）終了。1991年同第二内科助手。1996年米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）留学。1997年大分医科大学第二内科講師。2004年大分大学医学部総合診療部助教授。2013年同消化器内科学講座教授。現在に至る。

【専門領域】

H. pylori 感染症、内視鏡治療